たくさんの「おいしさ」を北海道から

豊かな色彩や心地よい香り、口いっぱいに広がる甘さやほどよい酸っぱさ、バラエティに富む食感、すぐれた栄養価…。「くだもの」は、そんなさまざまな要素で、私たちの食生活に潤いをもたらしてくれる大切な食べ物です。

「北海道の農産物」といえば生産量の多い野菜や乳製品、お米などのイメージを抱く人が多いかもしれません。しかし、実は北海道はくだもの生産も盛んで、たくさんの「おいしさ」と「くだものの魅力」を多くの人に届けている地域なのです。

Outline

さくらんぼ、プルーンは全国２位の栽培

北海道の冷涼な気候は、柑橘類や熱帯産果実を除いて、さまざまなくだもの栽培に適しています。このため、りんご、さくらんぼ、ぶどうを中心に、なし、プルーン、プラム、もも、うめ、くり、さらにはブルーベリー、ハスカップ、アロニアといった小果樹類など、さまざまな品目が栽培されています。

道内の栽培面積では、ぶどうが 1,150 ヘクタール、りんごが 641 ヘクタール、さくらんぼが 586 ヘクタールで、大きなウエイトを占めています。全国的に見ると、さくらんぼは、山形県に次いで全国２位、プルーンも長野県に次ぐ全国第２位の栽培面積となっており、日本を代表する生産地の一つです。また、小果樹の栽培も盛んで、北海道は日本の「ベリーランド」としても注目されています。

後志、空知、上川、留萌、胆振、渡島が中心

北海道のくだもの栽培の中心は後志の余市町、仁木町です。２町の栽培面積は道内の約６割を占めています。このほか、空知の岩見沢市、美唄市、滝川市、深川市、浦臼町、上川の旭川市、日本最北端の果樹地帯といわれる留萌の増毛町、胆振の壮瞥町、渡島の七飯町などが主な産地としてあげられます。

これらの地域のほかに、札幌市、千歳市、北広島市、石狩市、由仁町、長沼町、森町、洞爺湖町、厚真町、富良野市、比布町、網走市、北見市など、くだもの狩りや直売をはじめとする観光農園の取組が盛んな地域も、各地に広がっています。

History

明治の初め、七重村の農場から始まる

日本にはたくさんのくだものがあります。その中で、日本原産といえるものは日本なし、くりなどほんのわずか。多くは外国から伝えられたものです。

北海道のくだもの栽培は、函館近郊の七重村（現：七飯町）の農場に、そうした外国由来の西洋くだものの苗木がドイツの貿易商人R・ガルトネルの手により植えられた明治の初期から始まります。今から 140 年以上も昔のことでした。

くだもの栽培は北海道から全国に

北海道のくだもの栽培は、北海道開拓使が開拓使顧問H・ケプロンのアドバイスを基に、明治６年、アメリカから導入したりんご、なし、ぶどう、さくらんぼ、すもも、ベリー類などの苗を官園に植えて、本格的な栽培に着手したところから実質的な発達を遂げていきます。当時の日本のくだもの栽培は、みかん、なし、ぶどう、かき、うめなどの栽培が本州で局地的にみられる程度であったことを考えると、北海道は日本の先進地として歩み始めたと言えるでしょう。

この時期に導入された苗、栽培知識、技術は、北海道にとどまらず山形県、青森県などにも伝えられていきます。北海道のくだもの栽培はこうして、日本各地のくだもの栽培の「芽」となって全国に広がっていくこととなります。

（参照資料：「北海道果樹百年史」北海道果樹百年記念事業会）

さまざまな役割を担って全道に広がる

冷涼な北海道の気候は、「農薬の使用量を少なくできる」「果実の色が鮮やかになる」など、「安全・安心でおいしい」くだものづくりに適した面を持っています。そうした特徴を背景として、北海道のくだもの栽培は、大正から昭和にかけて、道央、道南地帯を中心とした各地域に広がりをみせ、昭和 44 年には栽培面積が 7,520ha にまで拡大しました。

また、くだもの栽培とともに、「くだもの狩り」「生産直売」などの「観光農園」の取組も全道に広がっていき、「人々にふれあい、うるおい、安らぎをもたらす場」という形で、観光や地域づくりを支える役割を果たすようになっています。